

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

日本人の疎開体験をめぐる文化史的研究

氏 名

李 承俊

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、アジア・太平洋戦争期に行われた人口移動としての疎開を中心とし、疎開に関する様々な言説を分析対象とすることで、疎開という出来事をめぐる文化史を構築することを目的とする。

序章では、本論の研究対象である疎開を人口移動としての疎開に限定し、研究史をまとめ、主に歴史研究において指摘されている課題に対して、歴史研究の成果を吸収しつつ文学研究で取り組む、とする本研究の方法を提示した。

第1部は、疎開体験に関する先行研究を積極的に継承し、戦争体験とされる疎開体験について多様な観点から考察を行った。

第1章では、防空体制を強化するために急遽立案・実施された学童集団疎開の「本義」をわかりやすく説明するためにいかなる言説が用意されたのかに関して考察した。政府は、疎開政策の「本義」をわかりやすく説明するために、「桜井駅の別れ」の例えを活用した。疎開政策が立案・実施されていた同時期の教科書・メディアなどを参照し、「桜井駅の別れ」は、学童集団疎開への参加が子どもの戦闘配置を意味するものである点を明らかにした。同時期の柳田国男『先祖の話』は、死を否定しない「七生報国」精神をわかりやすく説明したものだが、「桜井駅の別れ」と「七生報国」の結びつきを考慮すれば、柳田の仕事は結局、学童集団疎開政策に盛り込まれている死を否定しないイデオロギーを学問的に体系化したことになる点を立証した。

第2章では、空襲体験と疎開体験が銃後の戦争体験を語る際によく結びつけられることを踏まえた上で、1970年前後に疎開体験が「証言」される場合、体験者における体験のとらえ方の相違が存在する事実に関して論じた。空襲体験と疎開体験の「証言」を『名古屋空襲誌』と『学童疎開ちくさ』から読み解いていけば、常に相反する語りが共存するという事実が発見される。このように相反する語りは、一方が事実として認められることで、もう一方は黙殺されるしかない。このような「証言」を一元化しようとする体験者同士の軋轢に注目し、体験のとらえ方を集合して均一化する働きに

ついて考察した。

第3章では、戦争体験としての疎開体験を思想化することを目指して立ち上がった〈疎開派〉の世代主張を考察した。同人誌『疎開派』を分析し、「戦中派」「戦後派」という対立項を想定することで成り立つ〈疎開派〉の世代主張は、世代固有の「自己の様式」を確立することには失敗した点を明らかにした。大江健三郎「飼育」における牧歌性を、戦争に無自覚である農村共同体の後退性として意味づけてしまう〈疎開派〉は、都会中心主義に無自覚な世代主張であり、よって日本全体を包括する普遍的な思想の構築には失敗した。しかし、このような〈疎開派〉主張と距離を取りつつ、疎開体験を文学的に形象化しながら登場した作家たちが存在する事実からして、戦後における戦争体験論の上で〈疎開派〉に対する考察が必要である点を提示した。以上、第1部を通じて、戦時期から戦後の1970年前後にかけて戦争体験と意味づけられる疎開体験の多様な位相を考察した。

第2部は、第1部で考察した戦争体験としての疎開体験という言葉に与しない形で、疎開体験を文学創出の題材に活用した黒井千次と高井有一について考察した。ここでは、第1章と第2章で取り上げた疎開体験の語りが主に1960～70年代に集中することと連動する形で、1970年前後の文学・文壇における主要な争点の一つであった、「内向の世代」をめぐる多様な議論を積極的に受け入れることで、「悔恨共同体」のゆらぎを象徴する「内向の世代」の特質を、疎開を文学に書くということに注目して考察した。

第4章と第5章は、「内向の世代」を代表する作家としてよく取り上げられる黒井千次を分析対象とした。第4章では、「内向の世代」黒井千次における創作の特質を「実験」と規定し、小説「実験」として「聖産業週間」における「内向」を分析した。「現実の純粋労働」に対する願望からはじまる作中の労働実験は、非現実的な「純粋労働」をひたすら「現実」の中で追い求めるという意味で、失敗が予期されるものである。それは、黒井による小説実験を意味するものでもある。だが、失敗する小説実験を通じて、「自己の空位」を見出すことができた。黒井において「内向」する「自己の空位」として見出される「自己」は、身体感覚を通じて他者と触れ合う契機を内包するものでもある点を明らかにした。このような黒井における「内向」は、第6章と第7章で論じる高井有一においても類似する問題として導出される。

第5章では、第4章で明らかにした「自己の空位」と定位される黒井千次の「内向」という問題が、「世代」という問題と交差する地点から議論を展開した。習作期から自らの疎開体験の文学創作の題材に用いた黒井は、自ら世代の固有体験としての疎開体験を認めつつも、戦争体験＝疎開体験を原体験とする〈疎開派〉のような世代主張を拒否した。それは、原体験の前提となる確固たる「自己」＝〈私〉を見立てることができず、あくまでも「自己の空位」としてしか見出すことのできない黒井にとっては、

当然とも言える。黒井は「時の鎖」という小説実験をもって、思い出したくない疎開体験との「対決」を主人公の描写を通じて試みたが、失敗した。しかし、この失敗そのものが「悔恨共同体」の相対化として機能する「内向の世代」の特質をあらわすものである。第5章でも考察したように、身体感覚とりわけ触覚を媒介とする他者とのぶつかりあいを求める「自己の空位」を実験の前提において黒井の小説実験は、再評価されるべきである点を明らかにした。

第6章と第7章は、高井有一を「内向の世代」の特質を共有する作家として位置づけた上で分析を行うものであった。第6章では、縁故疎開の際に体験した母親の自裁を書いた「北の河」を分析した。高井有一は＜疎開派＞と規定されることは拒否しつつも「内向の世代」と規定されることを積極的に受け入れた。第5章と第6章で考察した「内向の世代」の特徴を高井有一「北の河」に代入すれば、「自己の空位」は「不確かな私」として見出され、「自己の空位」と向かい合う小説実験は「不確かな私」を凝視するために召喚される母の死、とまとめられる。このような高井の文学は、黒井が戦争体験としての疎開体験の思想化から距離を取る姿勢と同様に、あくまで彼個人の戦時期の体験としての疎開体験である母の死を、「不確かな私」を確かめるために思い起こすものである点を明らかにした。

第7章では、学童集団疎開の体験者である高井の差し出した学童集団疎開の「一証言」の作品発表の時点および2000年代以後の時点における批評性を立証した。第7章は、第2章において問題提起した「個別化」する体験の語り方／語られ方という問題を、新たな位相から照らし出すものでもある。高井有一『少年たちの戦場』は、作中の視点・時点が複合的に構成されている小説である。高井は、視点の移動を通じて、被害対加害の対立構造の最も暴力的なあらわれである戦争というものの暴力性をほめめかす。それは、＜疎開派＞のような「大義名分」を捨てることを宣言する思考と結びつくものである。時点の移動を通じて、鶴見和子「翻訳」や藤田省三「経験」のプロセスを描き出した。『少年たちの戦場』で体験の共有に悲観的な姿勢を描いたが、それは逆説的に他者の苦痛を自らの体験を通じて追体験して理解する営みの可能性を呈するものでもある点を提示した。これは、黒井と同様に、現在における過去の意味を問い直すことで、「悔恨共同体」的な時間意識を相対化する「内向の世代」の特質をあらわすものである。以上「内向の世代」文学における「内向」の問題が、決して自閉的な閉鎖性を意味しないことに関して、「世代」の体験としての疎開体験を形象化する文学的な試みを、「内向」と「世代」が交差する地点から読み解いていくことで考察した。

第3部は、疎開研究の最新動向に合流する形で、＜田舎と都会＞の関係を前景化させる疎開という事態が、文学にいかにか書かれているのかをめぐって考察したものである。

第8章では、石川達三に対する〈社会派〉という規定を積極的に受け入れつつ、『暗い嘆きの谷』を通じて究極的にいかなる社会告発を行おうとしているのかを分析した。石川達三は、疎開によって生じる都市文化と農村文化の衝突、特に食糧をめぐる女性同士の軋轢を的確にとらえた。これは、戦時期の疎開事情に対する実証的な調査において言及はされつつも詳細には触れられないデリケートな問題であり、その意味で本小説の「記録性」は認められるものである。このような疎開問題を暴き出した意図の背後には、戦時体制に非協力的な農村に対する問題意識が隠れている。〈田舎と都会〉の対立を描き出した作者は、団結できていない日本社会の分裂という問題を提起するために、そのような対立が顕在化する疎開という事態に着目したということについて考察した。

第9章では、田舎出身でありながら東京から田舎に疎開した太宰治の「津軽通信」に対する研究の必要性を提起した。「津軽」執筆において発見される「津軽人」としての出自は、「十五年間」において再び発見される。「十五年間」が「疎開者」としての立場を表明するものである以上、つたない「津軽人」という出自の再発見をもたらす疎開体験が、太宰にいかなるテキストを書かせたかを分析すべきである。「やんぬる哉」で太宰は、第8章の石川達三と同様に、食糧をめぐる女性同士の軋轢を描き出している。だが、受け入れ側の田舎出身でありながら東京から疎開してきた太宰、東京という都会文化の享受者でありながら受け入れ側に疎開してきた太宰、という立ち位置は、対立する〈田舎と都会〉のいずれの方を擁護することもできなければ難詰することもできないという、疎開体験を語る主体性の危うさ、体験の語りにくさを証明するものである点を明らかにした。

第10章では、上記の個別的に行われた研究を統合・再配置し、疎開体験の文化史叙述を試みた。全体をまとめつつ田舎と都会の出会いという問題が、第2章～第7章において取り上げた様々な疎開体験の表象が提出された1970年前後すなわち高度経済成長期の問題といかに結びづけられ得るのかを掘り下げたものでもある。要するに、各章において論じられた問題をつなげていくことで、疎開体験に関する文化史が自然に浮上するような記述を試みたものである。戦争体験としての疎開体験／田舎と都会の出会いとしての疎開体験の両者が、語られて論じられ得るコンテクストを、主に柳田民俗学に頼りながら明らかにした。そして、両者の語りのいずれにも分類することのできないものを坂上弘の文学から拾い上げ、戦時期と戦後をつなげる問題としての〈田舎と都会〉の関係性を浮上させる疎開について論じた。